

# 蓮如上人と本願寺ネットワーク

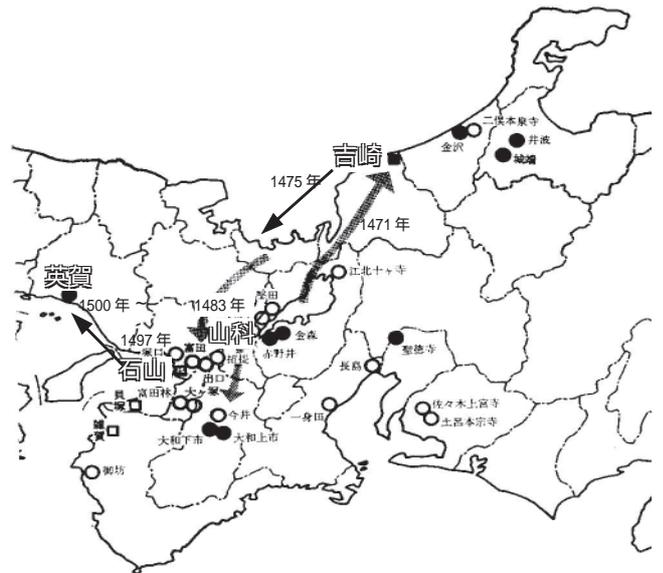
かくして本徳寺は蓮如上人を開基として開創され、播州の真宗勢力の最大拠点として誕生した。

蓮如上人の行動範囲は畿内を中心に琵琶湖沿岸、北陸、三河において顕著にみとめられる。言うまでもなく畿内とその周辺における20程の寺内町の分布を見れば一目瞭然である。

1475年の吉崎からの逃避行は近畿における本願寺ネットワークの始まりを意味していた。その成果は8年後、1483年、新都市・山科御坊の完成になって現われる。この頃まで、上人の念仏教化は瀬戸内海方面を睨む中・四国地方には及んでいなかった。しかし、山科本願寺建立の頃から、仏光寺(後の興正寺)・護国寺などの西国の先行真宗勢力による本願寺へに寄属が進み、それに呼応するかのよう、本願寺の西国方面の拠点・石山坊が周到に準備された。

1497年、上人83才に創建された自治都市・石山坊(後の大阪城)の出現は本願寺教団が新たな段階に突入したことを示す。以降、瀬戸内海航路をチャンネルに、本願寺の西国教化が一挙に開けた。

播州の一向勢力は1475年以降、蓮如上人の近畿県内での精力的な布教活動のなかで接触を始め、先行的な道場が散発的に存在するようになるが、本格的には、1490年頃から蓮如の側近空善が教団の意向として拠点づくりを始め、英賀に本徳寺が建立されてからである。これ以降、播州(英賀)が本願寺(蓮如)教団にとって西国方面の重要拠点となったことは間違いない。しかし、1515年の英賀御堂の盛大な落慶には、すでに上人の存在はなく、本願寺は実如上人に託されていた。したがって、播州の真宗は、本願寺の西国への進展のなかで、唯一、本願寺教団が最後に自主的に形成したサイトの最西端であるといつてよい。その後、播州の



『寺内町の研究』・第一巻・p24・一部加筆

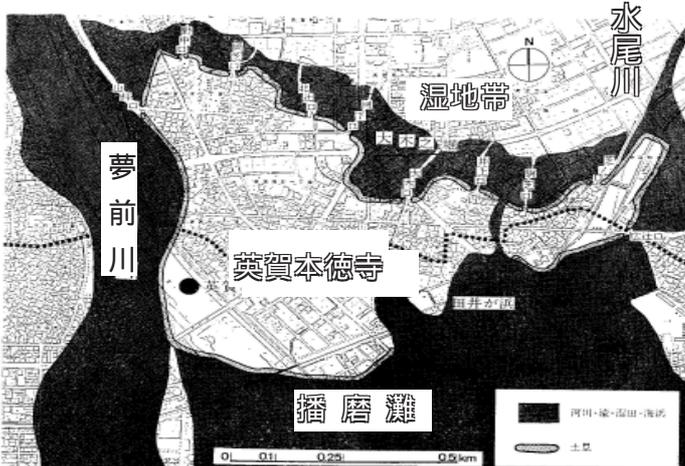


蓮如上人お木像(本徳寺所蔵)

念仏は本徳寺を中心に展開されるようになるが、英賀門徒が、実如上人に降、顕如上人にいたるまでの間に、内海交易において強力な社会勢力となって台頭してきたことは、本願寺ネットと無関係では語れまい。

このように、覚如・存覚からはじまり存如上人に続く先師時代を基礎に、時代の転機と蓮如上人の才覚によって組織の核が形作られ、その後の「実如」「証如」「顕如」と続く組織の成熟化と教団の社会的認知に終わる中世本願寺教団の形成の全過程を見通す作業のなかで、播州の真宗史の正当な位置づけもなされて来るように思われる。

## 自治都市・英賀



『寺内町の研究』・第一巻・p84

英賀は諸文献や先人の研究によると、明らかに寺内町の特徴を備えていた。周囲を海、河川、湿地帯で囲まれ、防御を意識した環壕都市であった。山科に見られるような河川の扇状地で、門徒達が自らの技術と労働をもって作り上げた中世都市であった。10ヶ所の木戸口には見張り立ち、外敵からの侵略に対する防衛は欠かせなかったのであろう。交易施設をもち、人と物資が内海経由で往還し、豊かな英賀の経済を支えていたと思われる。15世紀の末期から16世紀の前半にかけては旧佛教の宗徒が、16世紀の後半は武力集団がこの英賀を襲う。1582年英賀は秀吉に解体され、本徳寺は亀山に移築、その後、新都市姫路が城を中核に生まれた。